

史学・文化財学科の六十年と国際学術交流 ― 日仏共同研究を中心に ―

山本晴樹（名誉教授）

山本

ただいま紹介いただきました山本です。飯沼先生の話の中で最後に写真で出てきましたが、史学科の「生き残り」です。

最初、会長の白峰先生から、一〇年前の五〇周年のときに賀川先生が言われた言葉がありましたけれども、あの中でなるほどなと思ったのは、やはり地域に根ざした大学、地域の歴史文化を推進するのはもちろんだけれども、もう一つ、世界史的な見地に立って、というような言葉を残されていました。

私もそういう形で、今日は何気なくこういう国際学術交流というのを題名に挙げたのですが、前半が飯沼先生の地域文化に根差した話であるならば、後半は賀川先生のもう一つの、世界史的見地に立って、という方向の話になるのかなと思っています。その意味では、いろいろやってきたような気がするのですが、賀川先生の手内で踊らされてきたのかなという気も実はしております。それで、日仏共同研究の歩み、特に国際学術研究、これも賀川先生も非常に広くやられまして、先ほど一九七〇年代の話が出てきましたが、それ以前に日本とフランスの共同研究の話があるんですね。

先ほど話が出ましたように、二〇二三年は史学科、史学・文化財学科の創設六〇周年ということなんです。非常に早くからフ

ランスとの交流、国際交流、共同研究を始めました。創設二年後の一九六五年から一九六六年に、佐賀の唐津市における日仏合同調査があります。先ほど、飯沼先生も簡単に触れましたが、これは史学科の教員および学生、入学したばかりの学生も参加しています。賀川光夫先生が二年間、一九六五年第一次と一九六六年第二次、両方参加されました。

また、学生で当時三年生と四年生であった坂田邦洋先生、この方は一九七八年から二〇〇四年まで別府大学の先生でした。安楽勉さんという方も一年生から参加しました。この方は二年間参加されますし、野間重孝さんという方は一九六六年の二年生のときに、それから中村修身さん。この方は二年生のとき参加したというように、学生が日仏共同研究という非常に国際的な合同調査に、入学してすぐ参加されるという、ちょっと想像できないかもしれませんが。

この方々は高校時代からやってきた人たちばかりです。賀川先生を高校時代から知っていた方ばかりでした。坂田先生も高校時代から考古学に非常にのめり込んでいた方なんです。

その日仏合同調査が行われた宇木汲田遺跡ですが、佐賀県の唐津にあります。そして唐津川に注ぐ宇木川という川があって、

その途中の遺跡、ここで日仏合同調査が行われることとなります。なぜこの地が選ばれたかですが、フランス側から日本のどこかで日本の先史遺跡について発掘をしたいという希望が出されていきました。日仏合同調査の団長になるエリセーエフさんが一九五九年ぐらいから日本におられたようで、日本のどこかで共同で遺跡を発掘したいと思われていました。

その中で、唐津は大陸文化の玄関口ということもあり、それから九大はこの遺跡の調査をしていまして、後で出てきますが、特に九大の岡崎先生が何回か既に調査を行っている。岡崎先生も、フランスの考古学に対しても関心があったということなんです。

またフランスがなぜ日本に力を入れるのかというと、フランスは一九五〇年代半ばにベトナムのディエンビエンフーというところで大敗北を喫するのです。それでフランスの植民地から撤退せざるを得なくなつて、研究施設の中心がアジアの中からなくなつてしまつた。

その代わりになるのは本当は中国なんでしょうけれども、中国も共産化されていますので中国には置けない。そうなると日本しかなかつた。ということ、日本との文化的な交流を非常に深めたかつた。その辺もありまして、この地が選ばれる状況があつたようです。

実は賀川先生は早くからフランス考古学への関心がありました。一九六五年に日本考古学協会の総会が本学で行われます。会長は八幡一郎先生、日本大学時代の自分の先生です。史学科ができて二年、三年したときに、全国学会をやるんです。これはすごいんですよ。全国学会というのは並大抵でやれません。手伝いの学生も

いないといけませんから。ですから、入学したての学生なども全部駆り出されたといわれています。

そのときにヴァディム・エリセーエフさんという方が、「フランスの新しい考古学研究法」を公開の記念講演でされています。このエリセーエフさんがこの日仏合同調査のフランス側の代表者で、当時パリ大学の教授で、パリの中国美術で非常に有名なチエルヌスキー博物館の館長をしていました。日本にもいたわけですから、この方が団長になつたということです。

このエリセーエフさんは、日本にも縁がありまして、父親がセルゲイ・エリセーエフというのです。明治期の日本に留学して、夏目漱石の弟子にもなっているんです。ロシアの革命前の大ブルジョアの息子ですからロシア革命ではいられなくなりまして、フランスに亡命して、パリで日本人とも交流をする。明治期、夏目漱石との交流があるぐらいですから、日本人との交流をし、次に述べますが、中谷治宇二郎とも親交があつたといわれています。

そのセルゲイ・エリセーエフさんは、渡米してアメリカの日本の祖となります。この学問の系譜の中には、駐日大使にもなつたエドウィン・ライシャワーとか、東日本大震災後、日本に帰化したドナルド・キンさんがある。そういう重要な役割を果たす人がお父さんです。お父さんがパリに亡命しているときに生まれたのが、このバディム・エリセーエフさんということになるんです。中谷治宇二郎さんという方は、中谷吉郎の実弟なんです。中谷吉郎は雪の博士として有名な方で、「雪は天からの手紙である」で有名です。寺田寅彦の弟子ですから、文章家でもあります。

この中谷治宇二郎さんがパリ留学で得た科学的な考古学の手法

を日本で紹介していたのです。そして、会長の八幡一郎さんの東大の人類学教室の友人でもあったために、総会で遺影を掲げた。というのは、彼は一九三六年に若くして三五歳で亡くなっています。留学中、結核になり、由布院の亀の井別荘で療養中死去します。しかし、彼の学問を慕う人々はその後ずっと続いていました。

この中谷治宇二郎と賀川先生との関係ですが、日本大学での八幡一郎先生を通して、中谷治宇二郎のフランス考古学の手法から多くを学ぶということなんです。その遺影を見て、やはり懐かしむ人が多くて、では遺稿集を作ろうということで、『日本縄文文化の研究』という本が、一九六七年にできることになる。増補改訂版も一九九九年に出ています。この編集に協力したのは、当時の史学科のスタッフです。今永清二先生、東洋史の先生で、実は考古学にも非常に造詣が深かった先生です。その後、広島大学に行かれます。それから志垣嘉夫先生。一九七四年まで本学に在籍されるのですが、フランスの近世史が専門でしたので、中谷治宇二郎先生のフランス語論文を翻訳する。九大の西洋史出身で、賀川先生が九大の西洋史でフランス語のできる人ということ、どうも一本釣りで別府大に来てもらったという話も伝わっています。フランス語の非常にできる先生でした。

日仏合同調査に戻りますが、九州大学が中心になりました。その中心が鏡山猛先生。九州大学の考古学教室の初代教授です。日本史から分かれて考古学を創設された。非常に大きな苦勞をされて、考古学教室を作られたということですね。

その下に助教で岡崎敬先生。京都大学から来られた先生でした。この方もフランスの考古学に関心があって、その面もあった

のでしょう。当時、九大にいたフランス中世史の森洋先生とは友人でした。フランスに政府給費学生で留学して、戦後歴史学でフランスに行った最初の留学生の一人ではないかと思えますね。

そんなこともあって、森先生は日本とフランスとの間の交渉を担当されます。森洋先生は私が九大に進学したときの先生になります。一九九〇年から一九九八年、別府大学の先生になられます。まさか先生とご一緒になるとは思いもありませんでした。

賀川先生は別府大学の教授でしたが、九州大学にも非常勤講師で行っていましたので、参加します。特に九州での考古学に関しては岡崎先生と賀川先生が、もちろん鏡山先生も関係しますが、中心的になって推進される。それから助手では小田富士雄先生がおられました。この先生も別府大学に一九七一年から一九七四年までおられます。

日仏合同調査のフランス側の関係者としては、エルセーエフさん。そして、パリの人類学博物館の館員のミシェル・ブレジオン先生。外にエルセーエフさんと同じく、当時チエルヌスキー博物館の館員だったオリビエ・レピーヌ夫妻。ユゲット・ルーサーさんは、フランスの東アジアの研究機関極東学院の研究員でした。日本語も勉強されていました。それからダニエル・ポワールさん。後に、この発掘が契機になって、エルセーエフ夫人になります。当時は日仏学館の給費生で、この方は日本語が堪能で、通訳をされていたということです。ユゲット・ルーサーさんも、通訳もされていたと思います。

実はこのときの調査日誌が九州大学の考古学教室に残っているんですね。私も九州大学に行く機会が何回かありましたので、

考古学教室で見せてもらいました。特に第二次調査に関して、一九六六年一月二〇日から二四日にかけて行われたもので、詳細に出ています。「二月二日の晴れ、九時から一七時。調査員が賀川、永井、小田、近藤、田中、下條、橋口、塩屋、上田、高倉。これは別府大学の学生、坂田、安樂、野間。それから別の地区の盗棺地区に中村、これは別府大。」学生の名前がちゃんと書いてある。「レピーヌ夫人、ポワールさん。人夫四名」という書き方をしている。

それから一月四日になると、今度はブレジオンの名前が出てきます。そして一四日になりますと、ここに非常に注目すべき記述があります。「本日の調査でブリジオンのフランス発掘方法が非常に注目された(賀川記)」と、非常にこれは印象深かったのでしょう。フランスのパンスヴァン遺跡の発掘方法を導入して、非常に厳密な発掘方法が導入されたということです。

一九日になりますと、「午後二時にブリジオン先生帰国のため、一同最後のミーティングをする。先生の石器研究はこのたびの調査に非常に大きい意味があった。ブリジオン帰国」というふうな記載があります。

そして、続きがあり、「二月二〇日に、晴れで八時二〇分から一七時三〇分、午前中、RKB・TV毎日放送の協力によって、ヘリによる空中撮影(盗棺地区)があった」と出ていたんです。それで私は、もしかしたらこの当時の記録映像が残っているのではないかとRKB毎日に尋ねたんです。そうしたら、ビデオを送ってくれました。当日の放送原稿も送ってくれました。RKB毎日のアーカイブズは非常にちゃんとしているなと感心したんです。

続いて、「本日よりレピーヌ氏がブリジオンに代わって貝塚地区に配置される。」

「夕刻に、鈴木、レピーヌ夫妻。午後帰国」。そして二四日に「賀川、永井、小田、九大学生、別府大学生、人夫四名、本日で一応、貝塚の調査を終了」で日誌は終わっています。この調査日誌が残っていたのは、非常に貴重だと思います。

さて、賀川先生は日仏合同調査の思い出を一九七五年に赴任した私に、繰り返し語られました。特に何度も出てきたのは、ブレジオン先生との出会いです。フランスの新しい考古学の手法について、非常に懐かしそうに語られました。

九大で私が調査日誌を見ていたときに、ちょうど小田先生が来られていました。じゃがいもでの実演をしたと話されました。なることかという、じゃがいもを持って、そしてナイフで切るらしいんです。石片に見立てて、これはこういうふうにして割ったんだということも実演をされて、賀川先生とブレジオン先生二人で、熱心にそういう話をしていたそうなんです。それからもう一つ、ポワールさんは間に立ってよく通訳されていたものから、ポワールさんの思い出も非常によく出てきました。非常にきれいな方だったという話もされていました。

写真(図①)では、ブレジオン先生、賀川先生。小田先生が写っています。この看板は現在でも九大の考古学研究室に残っています。図②は、レピーヌ夫妻が帰国されるときの写真です。賀川先生の外、学生も写っていて、おそらく、日にちとしては一九六六年一月二三日だろうと思われれます。

この日仏合同調査については賀川先生が、大分合同新聞の夕刊



図②

オリヴィエ・レピーヌ夫妻を囲んで
（『賀川光夫追悼文集』2003年より）



図①

ブレジオン先生、賀川先生、小田先生
（『賀川光夫先生追悼文集』2003年より）

の「灯」欄に書かれています。一月二三日付ですから、調査が終わるか終わらないかの時です。「ミシェル・ブリジオンと私」と題です。

「最近、パンスヴァン遺跡発掘のスライドと説明を聞いたわれわれ日本の考古学者は、恵まれたフランスの文化への貢献に目をみひらいた。彼らの考古学に対する基礎の厳しさが、安易な日本人の古代へのあこがれを吹き飛ばす結果になった。基礎的研究に対する考えが日本人とは全く違うのである」。

「私はハナヒゲのブリジオンと連日討論し、発掘計画などを変更する。発掘しながら、彼は私の教えた炭坑節を歌う。彼の

日本語は炭坑節だから、私の日課は非常にシンドイ話である」。京都大学の先史考古学者、山中一郎先生はブレジオンの弟子として、よくブレジオン先生は興が乗ると炭坑節を歌っていたというんですね。だから賀川先生の名前はよく出ていたというんです。

「だが私は彼からフランスの伝統ある旧石器文化の基礎をこの間に学ぼうとがんばっている」。

「最近、日本で行われている旧石器研究が非常にそまつで、あるものはナンセンスに近いものであることも知った。そしてフランス人は、日本の事情もよく知っている。丹生台地のことも」

と書かれています。この最後の数行は、その後の日本の旧石器研究を考える場合に、非常に重い意味を持っている指摘だなという気がします。

賀川先生は、やはりフランスの旧石器の考古学を学びたいという非常に痛切な思いがあったことは、この文章からもわかります。

実はミシェル・ブレジオン先生とはその後も交流がありました、まだずっと続くんです。本学の橋昌信先生は、一九六七年の夏にブレジオン先生が発掘しているパンスヴァン遺跡を訪問されています。当時、助手でした。そのときの訪問記が残されているんですね。私は橋先生と最後の一年間ぐらい、部屋が一緒だったんです。私はこれについて知りたくて、何か書かれたものはないですかとお聞きしたときに、何かに書いたということは話されていません。けれども、そのままになってしまいました。しかし、ここ一カ月ぐらいのときに、見つかりました。それはフランスのパンスヴァン遺跡の訪問記で、『考古学ジャーナル』一九六八年一月号に載っているものなんです。橋先生はこの時、ブレジオン先生に会われたようです。実際に現地の発掘方法をいわば経験されたこととなります。しかし残念ながら、このブレジオン先生とのつながりはこれ以降、続きませんでした。非常に残念なことです。

フランスとの学術交流は、これ以降、共同研究から個人による研究に変わっていきます。志垣嘉夫先生は一九六八年から一九七〇年にかけて、デジジョン大学(フランスの中部にあります)にフランス近世史の研究で政府給付留学生として二年間行かれる。それから、史学・文化財学科のフランスとの共同研究に非常に大きな貢献をされる井上富江先生が、一九七三年から一九七四年にモンペリエ第三大学に留学されて、フランス中世文学の研究をされるということになります。

それから、私が一九九〇年に半年間でしたが、同じモンペリエ第三大学にフランスの古代ローマ史の研究に行きます。そのとき、賀川先生は学部長をされていたが、そのこともありまして承

認してもらったようなところがあるんですが、その際ブレジオン先生の消息を託されます。

それで私は一九九〇年七月に、フランス文化省を通じてブレジオン先生に手紙を出しました。帰国間際のことになりました。実は七月初旬に、「ニーム古代史学校」というものに参加したんです。ニーム古代史学校は第二次世界大戦以前から続く非常に古い、古代史に関心がある人たちがニーム市に集まって一週間、旅行も兼ねながら学ぶ学校です。非常に伝統がある。そのとき、記念講演でマルク・ゴージェイという人が考古学監督官として講演をしました。マルク・ゴージェイさんが考古学監督官だったものから、ブレジオン先生も文化省に移られて考古学監督官になっていましたので聞いてみたんです。すると、ゴージェイ先生はブレジオン先生の後任でした。これも非常に不思議な縁といえれば縁ですね。それでブレジオン先生の住所は確認できたということですが、後にゴージェイ先生からは外務省で調べてもらって、日仏合同調査のフランス側参加者の一人のユゲット・ルーサーさんの連絡先を知らせてもらいました。

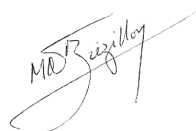
私がニーム古代史学校に約一週間滞在したこの間、モンペリエ大学の学生という形で受け入れてくれたものですから、旅行代とかは免除されたんですね。ですから私はニーム市には恩義があります。モンペリエに帰ると、ブレジオン先生の手紙が届いていました。早速、賀川先生へ手紙のコピーをお送りしました。図③はブレジオン先生の手紙です。これはコピーでして、原本は賀川先生に帰ってからお渡ししました。一九九〇年七月六日付になります。ブレジオン先生のサインも見えます。この手紙を賀川先生

Michel BREZILLON
8 rue des Prêtres
39270 ORGELET

Orgelet 6.7.1990

Cher Collègue,

Votre aimable mot vient de m'être transmis par le Ministère de la Culture. Atteint d'un cancer et ayant subi une grave opération chirurgicale, j'ai dû cesser toute activité archéologique et me suis retiré dans mon village du Jura. Je suis heureux d'avoir de bonnes nouvelles de M. Kagawa avec qui j'ai eu effet passé de bons moments au Kiu-Shu. Si vous lui écrivez, veuillez lui dire que je n'ai pas oublié Karatsu et lui transmettre mon meilleur et amical souvenir. Je vous souhaite une poursuite fructueuse et agréable de votre séjour à Montpellier et vous prie de croire à mes sentiments les meilleurs



図③

ブレジオン先生の筆者宛書簡（1990年7月6日付）

に送りましたら、賀川先生は早速八月三一日付の「灯」欄にこのことについて書かれました。次の一節です。

「ブレジオンは帰国後、パリ大学からフランス文化省へ移り毎年のようにフランス考古学の重要な資料を送ってきたが、一九七五ごろから音信がとぎれた。（中略）山本氏は早速ブレジオン氏に文通し、次のような返事もらい、そのコピーを送り届けてきた。

『私はがんにおかされ、外科の大手術を受け、すべての考古学

の活動をやめねばなりません。今、私の郷里スイス国境のジュラ県の村に引きこもっています。あなたの手紙で、賀川先生がお元気でいることを知ってうれしく思います。彼とは本当に楽しいひとときを九州で過ごしました。もしあなたが彼に手紙を出すときがあれば私は唐津での思い出を忘れていないことをお伝えください。そして私の最良の感情をお信じ下さい。ミシェル・ブレジオン』。

「文字の筆跡も彼のサインも昔と全く変わってはいませんが、ジュラ県に隠遁し、考古学と関係をなくした寂しさが文中ににじみ出ている。思えば私も唐津での発掘後まもなく胸部の大手術を受け、右肋骨一〇本を切除し、一時は考古学をやめねばならないと思ったことがあった。幸いにも不治の病を回復し、ブレジオンの開発したパンスヴァン方式の研究法の教訓を今に学び続けている。二人はともに七〇歳に近い年齢である。パンスヴァンの保護区の発掘報告書を片時も離すことなく、彼と共に歩み続けている私には、小説の中の出来事のような数奇な出会いと運命を感じてならない。」

非常に美しい文章です。こういうものを書かれています。これを見て、私も賀川先生のお役に立ったかなという気がしました。そして、せっかくなら日仏合同調査に関係した人々のその後を追ってみたいと思いました。私も何回かその後、フランスに行く機会もありましたので、その調査を続けてみたいと思ったのですが、ミシェル・ブレジオン先生はその後、一九九三年に亡くなられたんです。郷里には先生の名前を冠した中学校があるようです。

エリセーエフさんは、二〇〇一年一月に亡くなられました。パ

リ第一大学（ソルボンヌ大学）の教授をして、また東洋美術で有名なギメ美術館の館長をされたということです。

ルーサーさんはどうも生没年がはっきりしません。ただ、ちょっと調べてみますと、パリ第一大学で学位取得をされています。指導教官がエリセーエフ教授だということです。一九八一年のことで、「九州のプロトヒストリック時代の装飾墓」という学位論文を書かれています。さらに、ルーサーさんは一九八七年に『朝鮮の芸術』というのを出版されています。朝鮮の文化史にも詳しい方だったということですね。

それからダニエル・ボワールさんは、その後、エルセーエフ夫人になります。日仏合同調査が一つのロマンスを生んだということなんです。二〇〇一年には『日本の歴史』を出版される。また、日本関係の出版も、中国関係の書物も出されています。

ユゲット・ルーサーさんについては、フランスの文化省考古学監督官のゴージェ先生から連絡先を教えてもらい、その後、手紙のやりとりをすることになりました。二〇〇一年に賀川先生が急死されたことを知らせると非常に悲しまれて、関連の新聞記事を送って欲しいと頼まれたことがあります。ルーサーさんは日本語の文章も読むことができました。二〇〇二年、学生と共にフランスを訪れたことがあります。その際、パリでのご自宅へ電話をする機会があったのですが、病気のために入院するということでした。当時八〇歳です。二〇年ぐらい前ですから、おそらくその後、亡くなられたかもしれせん。

それから、エリセーエフ夫人には実は出会うことができたんです。二〇〇二年一〇月、海外研修で学生とパリを訪れたときに、

エリセーエフ氏がかつて館長を務めたチュエルヌスキー美術館を訪問したのですが、あいにくそのときは二〇〇五年まで修復のために閉館していました。その代わりにエリセーエフ氏が館長だった、東洋美術で有名なギメ美術館を訪問したのですが、帰り際、美術館の事務所のドアが開いていたのでふと中へ入り、フランス極東学院（EFEO）の場所を訪ねたら、すぐそばでした。

ここにエルセーエフ夫人が勤められていることは把握していました。極東学院をやつとのこと、探し当てたんです。夫人の所在を確かめると会えるとのことでした。夫人はアポイントメントなしにもかかわらず会っていただきました。実はそれ以前にパリに行くことがありますのでお会いできるかもしれませんという手紙は書いていたのです。ついに唐津での日仏合同調査の「生き証人」との出会いでした。その際、夫人からはご著書『日本の歴史』をいただきました。図④は、そのときの写真です。二〇〇二年ですね。一九三八年生まれですから六〇歳ぐらいでしょうかね。西南学院大の高倉先生は、フランスの映画女優のように美しかったというふうにいわれていますが、それをほうふつとさせるような方でした。

当時のことをお伺いしましたら、やはりエルセーエフさんは唐津の調査について非常に詳細なメモを残されているということですね。それが解読できたら、またいろいろな情報が出てくるのかもしれないですね。夫人は今現在、八三、四歳でしょうか。まだご存命だと思えます。

それからオリヴィエ・レピーヌ夫妻のことですが、長くその消息は分かりませんでした。以前勤務していたチュエルヌスキー美術館に手紙で問い合わせたところ、パリの別の美術館に移られて、



図④
エリセーエフ夫人と筆者（2002年10月）

そこで退職されて、南仏に行かれたということで、これ以上の追跡は無理だろうと思いましたが。日本では退職されて、九州に

行かれたというふうなものです。これは探しようがないです。けれども、これは私の「動物的勘」ですが、南仏で年金生活を送るのであれば、その都市は、実は候補としては二つ挙げられるんです。一つはエクサンプロヴァンス、もう一つが実はモンペリエなんです。二つの都市は退職者に非常に人気のある都市で、二つの都市とも「老人と学生」の街といわれています。

モンペリエにはそういう感覚はなかったのですが、エクサンプロヴァンスはパリからの退職者が南仏へ行く場合の都市になりまますので、この可能性が高いのではないかなという気はしていました。しかし、エクサンプロヴァンスに行く機会はなかなか訪れませんでした。偶然そのチャンスが巡ってきたんです。ここがまた不思議なところです。

非常に唐突ですけれども、ここで突然話はチュニジアの古代ローマ劇場発掘計画に変わります。しかしここは話としてはつながつてきます。一九九〇年のモンペリエ第三大学での在外研究のときに、フランス語のクラスの先生が考古学が趣味で、私が考古学に関心があることを知ると、モンペリエ郊外にあるラット考古博物館の主任学芸員のクリスティアン・ランドというローマ考古学者を紹介してくれました。

ランド氏とはその後、長く交際することになります。奥さんも非常に日本びいきで、特にジブリの大ファンで、「千と千尋の神隠し」の映画は四回見たと言われていました。

ランド氏はチュニジア（旧フランス植民地）の考古学者と交流があり、現地での考古学発掘を計画していました。アルジェリアでも計画していたようですが、当時、アルジェリアは凄惨な内戦を行っていました、とても考古学発掘などできる状況でなく、発掘していても銃撃されるような状況がありました。チュニジアはそれと比べると安定していましたので。二〇〇二年五月に、チュニジアの首都チュニス郊外のウドウナ（古代都市ウティナ）で、ローマ古代劇場の発掘が企画されたときに、その予備調査に私も参加させてもらったんです。

このウティナ古代劇場発掘計画の関係者は、チュニジア側の責任者がハビブ・ベン・ハッサンという人で、チュニジアの文化省の文化財活用・振興局長、文化財を活用する、つまり観光関係です。フランス側はクリスティアン・ランドさんが責任者です。そして、ミシェル・ジャノンというフランスはエクス（ここにエクスが出てくるんです）古代建築研究所（IRAA）の研究員です。あと、

ダニエル・ミレットさんと若いカナダのバンクーバー大学の先生、そして私ということで、この四人で予備調査に行ったという事なんです。

ウティナの円形闘技場の方は既に発掘は進められていて、二〇〇二年五月当時こんな感じだったんです(図⑤)。注目しているのは、発掘しているのですが、もうここで元の姿を復元しているんです(図⑥)。これは結局、遺跡を早く復元した状態にもってきたい。なぜかという、これを観光資源にしたいんですね。当時から観光客を見込んで、発掘を

すると同時に復元をするという風でした。一緒に行った考古学者は、これは「遺跡に対する虐殺」であると憤慨していました。

図⑦は、劇場遺跡のいわば崩れ落ちた跡の前で計画を話し合う四人で、左からミシエル・ジャン、ハ



図⑤
ウドゥナの円形闘技場の発掘風景
(2002年5月、筆者撮影)

ビブ・ベン・ハッサン、ダニエル・ミレット、そしてクリスティアン・ランドです。

この古代ローマ都市ウティナ(現ウドゥナ)ですが、一世紀の初頭にローマ退役兵植民市として建設されて、アウグストウスの第十三軍団の退役兵が植民されることになるんです。最盛期は紀元後二、三世紀で、最大面積一二〇ヘクタール、非常に広大な都市です。

ですけれどもその後、チュニジアはイスラム化しますので放棄されて、発掘開始年度は一九九三年です。二〇〇二年五月段階では、古代ローマ都市遺跡公園として整備中でした。首都チュニスの南方40kmのところにあるものですから、当時の大統領(ベン・アリ)のお声かかりの事業になっていました。

ですが、この発掘計画は挫折します。今考えても残念なことですけれども、日本での企画の不首尾ですね。いろいろなところ企画を出してみたのですが、なかなか採用されなかったことがあ



図⑥
ウドゥナ円形闘技場の復元風景 (筆者撮影)

ります。私自身も日本での考古学発掘すら経験したことがない者が、海外での発掘に参加すること自体、無理があったという事です。

チュニジアの方も政治状況の激変が実はあったこともあります。いわゆる「アラブの春」と呼ばれるものが起こります。二〇一〇年のことです。

チュニジアも、民主化運動の影響を受けて、二〇一〇年末に「ジャスミン革命」が起こります。実はチュニジアから「アラブの春」が始まったということなんです。先ほど言った大統領のベンアリ体制が崩壊し、そして民主化が進んで、チュニジアは民主化運動の、「アラブの春」の優等生と呼ばれまして、二〇一四年には民主化運動団体にノーベル平和賞が与えられることがありました。しかし現在は、政治的、経済的に不安定な状態が続いている状況のようです。

ただ、二〇一三年二月にチュニジアへの旅行で知り合ったミシェル・ジャンソンさんを訪問するために、エクサンプロヴァンスへ行



図⑦
ウドゥナ古代劇場遺跡前での4人の考古学者

く機会が出てきました。エクサンプロヴァンスのエクスというのはアクア（水）から出た言葉で、水が湧いているんです。ローマ時代からある都市です。非常にしゃれた街です。マルセイユで成功した商人たちが作った別荘地です。日本で言えば軽井沢のようなところになります。エクスには、また地中海沿岸の古代史に関する非常に大きな研究所があつて、ここへ行く用事もありました。研究所の用事を済ませた後にエクスの観光案内所で、以前から気になっていたオリヴィエ・レピーヌ夫妻の消息を調べることにしました。もしかしたら電話帳に載っているのではないかと、観光案内所で電話帳を借りて調べてみると、なんとオリヴィエ・レピーヌ氏の電話番号が載っていたんです。これほどずばり当たるとは思っても見ませんでした。オリヴィエ・レピーヌという人の綴りを見たときには、思わず鳥肌が立ちました。

オリヴィエ氏の消息が分かったものですから、早速電話してみたところ、どうも反応がないなと思つたら留守番電話でした。しかし、これを残しておいたからでしょうか、その夜にあらためて電話してみると、おそらくお嬢さんと思われる方が出られたので、「レピーヌさんは日本に行かれたことはありますか」と聞いてみると、「ある」と、すかさず、「レピーヌ氏はパリのチュエルヌスキー美術館の学芸員でしたか」と言うのと、「はい、そうでした」と答えられたんですね。まさにあのオリヴィエ・レピーヌ氏だったんですね。まさか本人にいき当たるとは思ってもいませんでした。エクスに行ったかいたことがあったことになりました。

実際にオリヴィエ・レピーヌ夫妻と会うのですが、ここでミシェル・ジャンソンさんと知り合っていたのが幸いです。五月にもう

一度、エクスに行く機会があり、ミシェル・ジャンソンさんに会って、今後の発掘計画を話し合うことにしていました。

五月一日、フランスはメーデーのために交通機関はストップします。オリヴィエ・レピーヌ氏のお宅へはジャンソンさんが車で連れていってくれました。前日に、住居を確認してくれていたのですが、自分で探す必要はありませんでした。ジャンソンさんがいなければ、夫妻宅へ行き着けなかったかもしれません。特に交通機関がなかったときですから。

チュニジアでの発掘計画は結果的に頓挫してしまいましたが、ジャンソンさんと知り合うことで、日仏合同調査のフランス側のもう一人の「生き証人」と出会うことができたんですね。

レピーヌ夫人は当時写真を撮られていたようで、写真を非常に多く持っておられました。この写真(図⑧)がご夫妻です。本を持っていらっしやいますね。これはちょうど、賀川先生の追悼アルバムが出たものですから、それを持っていったんで



図⑧

オリヴィエ・レピーヌ夫妻(2003年5月、筆者撮影)

すね。この写真(前掲図②)を見て、これは私ですとおっしゃいましたので、間違いないことになったのです。

日仏共同研究に話をもどしますと、新たな日仏共同研究が始まるのは、一九九九年以降です。モンペリエ第三大学との交流協定が結ばれまして、教授および学生の交換が出てくるんですね。モンペリエ大学側は当時、ミシェル・ヴェイユ学長とジャン＝マリ・プティ教授というオック語の研究者が来学され、別府大学側は井上富江先生がその責任者になるということで、共同研究が始まっていくことになりました。

二〇〇一年は国際交流基金による「南フランスのローマ化とラテン化」というテーマで、日仏共同研究が行われました。奇しくも賀川先生が亡くなられた年です。私のモンペリエ第三大学での在外研究での受け入れ責任者であった。当時の学長ミシェル・ゲロー先生がフランス側です。

別府大学側では馬場典明先生、私の九大時代の恩師ですが、別府大学にも一九九七年から二〇〇三年までおられました。二〇一八年に亡くなられました。それから井上富江先生、そして飯沼賢司先生と私という形で、共同研究がこのときに行われるます。このときはシンポジウムをその年の一〇月に別府大学で開き、ミシェル・ゲロー先生が「ガリア南部(ローマ期南フランス)における皇帝礼拝の開始に関する最近の諸観点」、飯沼先生が「聖武皇帝の国家構想と八幡神」という講演をされました。シンポジウム詳細は『史学論叢』の三二号に載っています。歓迎会も写真(図⑨)のような形で行われました。

話が飛びますが、二〇一四年になりますと交換教授としてマル

ティーンズ・アセナ先生が来られました、この方は実はミシエル・ゲロー先生のお弟子さんなんです。古代ローマ史で歴史地理学、ガリア・ナルポネンシス（ローマ時代のフランス南部）の東部の方格地割（日本の条里制と類似）の研究者です。トルコの都市の世界遺産登録



図⑨

ゲロー先生を囲んで（2001年10月拙宅にて）

にも関わった方です。大分県中津市の条里制遺構（沖代条里）の見学をされ、フランスの方格地割との比較研究の提案をされるんです。中津市教育委員会が非常に協力的で、また当時の市長（新貝さん）が非常に関心をもたれ、翌年の国際シンポジウムにつながっていくこととなります。

翌二〇一五年になりますと、同じくミシエル・ゲロー先生のお弟子さんのアントワヌ・ペレス先生、この方はガリア・ナルポネンシスの西部の方格地割の研究者です。この先生を招いて、中津市と別府大学共催の国際シンポジウムが、「条里と道と祭祀―古代ローマと日本をつなぐ―」というテーマで行われました。

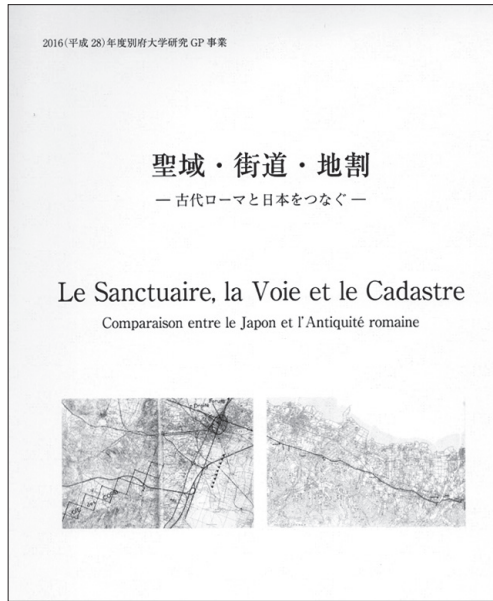
ペレス先生は「ローマ世界におけるケントウリア地割の政治的、

宗教的機能」という講演をされ、地割に政治的なもの、あるいは宗教的なものを見ていこうという、非常に斬新な提案をされました。飯沼先生は「宇佐八幡宮の登場と官道、条里」という講演で、八幡神の街道と地割を結び付けるという話をされました。それから、木本雅康先生は長崎外国語大学の先生で、歴史地理学者ですが「古代日本の地域計画―豊前国を例として」という講演でした。先生は中津市の街道や条里制については、これまでずっと関わってこられた方ですが、残念ながら二〇一八年に亡くなりました。享年五四でした。木本先生が亡くなられたのは、われわれの共同研究にとっては非常に大きな痛手でした。

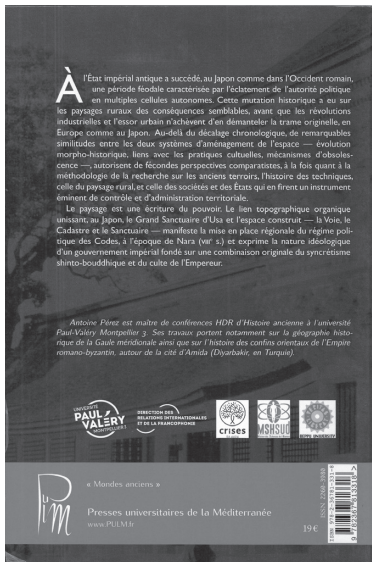
二〇一六年、今度は、モンペリエ側で私と飯沼先生を招いてくられました、シンポジウムを行いました。テーマは「中津条里―ある特異な文化的景観―」です。これはナルポネンシスの首都、ナルボンヌの地割と、中津・宇佐の古代官道・条里を比較研究してみようというものです。いずれも直線で構成されている、古代のいわば「直進性」というものを、東西で表すものではないかということ、これが研究対象になりました。

その成果は、『聖域、街道、地割―古代ローマと日本をつなぐ―』という報告書になります。二〇一六年、二〇一七年、二〇一八年は私と飯沼先生が、二〇二〇年、二〇二三年は飯沼先生と飯坂先生が編集・出版し、全部で五冊刊行することができました。図⑩がこの五冊の報告書の表紙です。最近、ペレス先生から、この報告書をモンペリエ大学の図書館に五冊全部入れましたというメールがきていました。

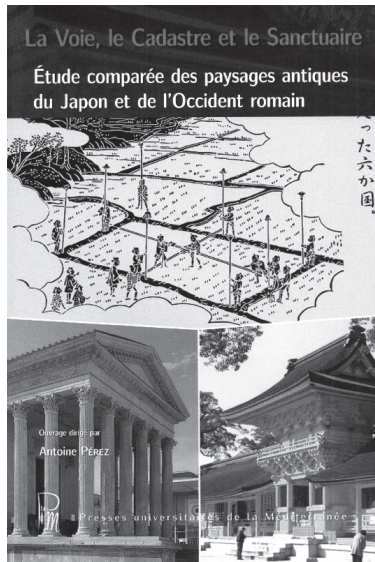
こういう形で日仏共同研究が進められてきて、これの集大成と



図⑩
報告書『聖域・街道・地割』第一集
(2016年10月)



図⑫
前掲書の裏表紙



図⑪
A. ペレス編『道・地割・聖域—日本とローマ帝国西部の古代景観の比較研究—』2020年フランス大学出版(仏語)の表表紙

どうか象徴的なものが、一冊の単行本の出版ということになるんです。フランスの大学出版で出した本です。図⑪と⑫は、その表紙と裏表紙です。図⑬は、裏表紙の注目してほしいところを拡大したものです。左端がポール・ヴァレリー大学（モンペリエ第三大学）のロゴマーク、右端が別府大学のロゴマークです。私はこの並びを見て非常に誇らしい気持ちになりました。別府大学のロゴマークがちやんと印刷されていたのですから。

最後に、別府大学のロゴマークについて。私はこれは普遍性と国際性を持ったロゴマークではないかと思えます。VERITAS LIBERAT（真理はわれらを自由にする）の言葉があって、まさに普遍性を表す言葉です。BEPPU UNIVERSITYと記されたこのマーク、これはまさに国際性を表します。この別府大学のロゴマークは今後も大事にしていただきたいと思います。



図⑬

前掲書裏表紙のロゴマーク部分の拡大

司会

山本先生、どうもありがとうございました。別府大学の史学科、文化財学科、史学・文化財学科の行ってきた学術交流、共同研究について、山本先生ご自身のご体験等々を中心に、振り返っていただいたご講演だったかと思えます。

お願いをしていたお話は以上でお話しいただいたのですが、講演の時間自体は一六時二〇分まで取っていました、もし先生方よろしければ、本来こういう講演会ではフロアからの質問はあまり受け付けることはないのですが、この機会にお二方の先生方に何かお尋ねになりたい方、ご質問、ご発言等がありましたら、挙手にてお願いいただければと思いますが、いかがでしょうか。

どうでしょうか。では何か、お二人からさらにまたお話があれば。

飯沼

別に補足はないのですが、二人で時間があれば少し話をしようかなと思つて、せっかくですから山本先生と。

今回、史学科のはじまりと国際交流というのですかね。賀川先生の夢が、まさに地域から世界へというのですかね。

私も合同新聞の文化賞をもらったとき、まさに地域から世界へ向かうという思いでやってきました。決してローカルにしてローカルではなくて、ローカルにしてグローバルな世界を目指すというのが別府大学の精神だとずっと思ってきましたし、ここに来てそういうふうに出てきたことが、実際にたどってみると本当にそうだなと思えます。

賀川先生の歴史をたどっていくと、最初のときに大分という、まさに先生にとっては知らない場所へやってきました、そこで出会ったところから、小さな遺跡の世界から世界を見据えながら発掘を

していく。決して狭い世界ではないんですね。考古学といって、今、非常に狭い縦割りされたような分野分野の世界に入っていくのではなくて、考古学の世界の古い時代から、まさに賀川先生の場合には歴史時代まで、ありとあらゆる世界。そして、交流の点においては、アジアからヨーロッパまでの広い範囲まで広がっていく。そういう精神をわれわれも受け継いでいきたいなと思つてやってきました。

先ほど言いましたように、賀川先生の考えられた構想を、手のひらの上で私たちは踊らされてきたと。山本先生が言われればそうかもしれないですが、それを本当に実現できたかどうかは、今後まだまだこれから続く、われわれの後輩にそれを受け継いでもらわなければならないと思いました。

あらためて、フランスのことを先ほど山本先生は言われて、二〇〇一年、私は何も知らないまま、フランスのモンペリエ大学のゲロー先生と一緒に講演をさせられたのを思い出しました。あれは、させられたんですね。なにか知らないけど。山本先生が、私が翻訳をするから大丈夫だと言われたんです。私は自分ではフランス語なんか全くできないのだけれども、フランス語の論文を、私の話を全部翻訳して、それで史学論叢の雑誌の中に載せたのは、たぶん山本先生です。

そういうことがあって、私とフランスの関係ができました。二〇〇一年から、井上先生、そして山本先生、そういう先生に導かれながら、先ほどのフランスというところに随分私も何十年も関わってきました。

山本先生の先ほどのチュニジアの話も裏を話すと、山本先生が

チュニジアで測量をしたいというので、機械がほしい。機械を日本で中古を買ってみたいと言ったら、これが当時の国策の輸出禁止か何かの項目に入って、実は測量機械を送ることができない。本当に真面目に測量をやるつもりで話をどんどん進めていたんだけれど、結局そこでつまずくとか、いろいろ大変なことがあります。先ほどの話を聞きながら、私も思い出しました。

だから、私は来てから、放り込まれてよく分からないのだけれど、いつの間にかフランスとの関係を作られて、そして気が付けば自分も何回も何回もフランスに通うことになったという感じですね。

皆さんもそうなんですが、そのときはなんだかよく分からないけれども、まず、いろいろな人との出会いがあって、それを契機に、それをあと自分がどういうふうに生かしていくのか。だからこれは嫌なのではなくて、後で思うとチャンスだなと。

不思議ですよ。先ほど言ったように人との出会い。山本先生の話聞いていくと、次から次へ芋づる式に運命の出会いがやはりあるんだとあらためて思います。私もそういうことが、本当にあるんだと思います。

私はフランスに最初に行ったときに連れて行ったのが、あそこにいる今の学科長上野淳也です。私が連れて行ったのではなくて、私が寂しいからついてきてくれと言ったら、ついてきたというのが上野淳也さんです。他にも理由はあったんですけど、それは今は明かしません。

もう一人、今、明豊高校の教員をしている高陽一さんという人物がいます。これが二人でついてきて、三人で珍道中でフランスに行くことになりました。それで私は二〇〇六年、初めてフラ

ンスに行くことになったんです。

またそのあたりについては一六日からフランスとの交流展をやりますので、展示のほうで見て、またシンポジウムのときにいろいろとお話が出てくるかなと思います。

本当に井上富江先生との関わりというか。井上富江先生はなんでも強引にやる人でありまして、最初のころは山本先生もかなり強引にやられて、たまらないと言っていたのですが、あの強引さが逆にいろいろなことにつながりを作ってくれたという部分もあるのかなと思います。

私もかなり強引にやられて、もうモンペリエに行くことが決まっていますとか言われて、私はそんなことは聞いた覚えがないというような感じで、冗談かと思っていたら、本当にモンペリエに行かされてしまった、そういうことになります。

だから、先ほど言いましたように、今日のお話もありますが、さまざまな人たちとの出会いというか。賀川先生もそうですよね。本当にいろいろな人に出会いながら、そしていろいろな人とともに一緒にやってきて、こういう歩み六〇年を知る。そしてそこには、本当にたくさんの方々が関わってやってきたんだと思います。

気が付けば私も七〇歳。晴樹先生は私よりも三つ上になります。七三歳ですよ。この六〇年を機に、最初にも言いましたが新たな第一歩というか、また違う意味での挑戦に踏み出したいですね。ただし、その六〇年の歴史というものを絶対に忘れないようにしていただいて、その次のステップに踏み出していきたいのです。

私は先ほど山本先生が言われたように、われわれ史学・文化財学科には、本当に誇れる歴史があると思います。これだけのことがやれてきたということ。気が付けばこんなにやってしまったんだなというぐらいのいろいろなことがやれてきた部分もあるので、ぜひともそれを踏まえた上で、さらなる飛躍を期待したいと思っています。

山本

補足として、飯沼先生が史学論叢に私が訳したと言われましたが、あれは違いました。ステファン・クレール君が訳しました。他の講演のときに私が訳した覚えがありますけれども、『史学論叢』に載っているのは、ステファン・クレール君の訳ですので、そこだけ一つ訂正をおきたいなと思います。

それから、日仏合同調査のときにいろいろな方に、賀川先生の後、出会うのですが、私は話の中では私の運がよかったと言いましたが、賀川先生の強い思いがあったのかなと考えています。

ああいう強い思いがあつて私の背中を押したような、そういう気が強くしています。ブレジオン先生もフランスに帰って、賀川先生との交流は非常に懐かしいとよく言われていたようですし、賀川先生もブレジオン先生、不思議とエリセーエフさんの話はないんです、ブレジオン先生の話は繰り返し繰り返し言われていましたので、私もなんとかしてその関係の方にお会いしたいと思っています。

ブレジオン先生に直接お会いできなかったのは残念でしたが、ポワールさんやオリヴィエ・レピーヌ夫妻にお会いできたのは、私よりも賀川先生の強い思いがあつたからではないかなという気

がしています。

ですから、史学・文化財学科の六〇年の中で、フランスとのつながりが案外強いんだということをつくづく感じました。この交流をやはり大切にしていきたいという気がしています。

司会

お二人の先生方、どうもありがとうございました。本会は六〇年の史学科、文化財学科、史学・文化財学科、今日に至る歴史に貴重なお話を先生方に頂くことができました。あらためてお二人の先生方、飯沼先生、山本先生、どうもありがとうございました。